



## アンドリウ・マーヴェル研究序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新井, 広 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000146">https://doi.org/10.32150/00000146</a>

## アンドロウ・マーヴェル 研究序説

新 井 広

北海道学藝大学旭川分校英語英文学研究室

Hiro ARAI : A Preliminary Study on Andrew  
Marvell—a Metaphysical Poet

## 序 論

第一次世界大戦後、エリオット (T. S. Eliot) によつて叫ばれた “Donne Revival” 所謂、技巧派詩人の再認識は、英詩の流れゆく本流を展示したのとして意義深い。この「メタフィジカル」派と呼ばれる詩人の中でも特異な存在であるアンドロウ・マーベル (Andrew Marvell) の詩について、述べて見度い。彼の詩は抒情詩と諷刺詩に分類される。その何れがマーベルの特長を示しているか簡単に云えないが、“English Prose and Poetry” の注釈者マンリー (John M. Manly) は曰く

“As Cowley is associated with the Stuart court, so is Marvell with Cromwell and the Protectorate. The vigor so striking in his work as a satirist and pamphleteer stiffens his lyrics and makes them today much fresher and more interesting than Cowley's work.” (English Prose and Poetry, selected and annotated by John Matthews Manly, P. 805.

マーベルが諷刺作家として又小冊子発行者として、その作品中に見られる強さ、それが抒情詩をも固いものにし新鮮なものにしている、面白いものになっていると、カウレイの作品と比較しているが諷刺詩と抒情詩とに対するマンリー教授の観る眼には自から軽重の差が見られる。云いかえれば、抒情詩人としてのマーベルは現代に於て重用性を加えたと考えられる批評である。メタフィジカル派の詩人としてのマーベルも彼の抒情詩、田園詩を意味するもの様である。チャールス・ラムの「エリヤ隨筆集」にある「内寺院の老法学者」中に引用されてあるのは、“What wonderful life is this I lead” に初まる五節の詩で、「庭園の冥想」“Thoughts In A Garden” よりの技藝である。“Benham's New Book of Quotations”<sup>1)</sup> (by Benham Revised Edition) にあ

るのはクロムエルを称えた詩丈である。マーベルの抒情詩が、特にメタフィジカル派の優秀なる例として近代に於て再認識されたことは英詩主流の認知と呼應して極く自然である。

## I. “Metaphysical Poetry”

“Metaphysical Poetry” の特徴を知る爲に J. C. Grierson ; Cambridge History of English Literature, P. Xiii, (preface) “Metaphysical Lyrics and Powers of the Seventeenth Century” を見ると、“Metaphysical poetry, in the full sense of the term, is a poetry which, like that of the *Divina Commedia*, the *De Natura Rerum* ; perhaps Goethe's *Faust*, has been inspired by a philosophical conception of the universe and the role assigned to the human spirit in the great drama of existence. と書き起し、この詩の原意が、人類生存の大いなる役割や、宇宙に関する哲学的観念より、その名を得たと記して、“It is no such great metaphysical poetry as that of Lucretius and Dante that the present day deals with, which this volume seeks to illustrate.” (現代に於て取扱い、本書が例証せんとしているのは、ルクレシアスやダンテの大いなるメタフィジカルの詩では無い) と述べて、Donne に初まる十七世紀の “Metaphysical Poets” を、紹介している。尚、更に少し長く、グリアソンの言葉を引用して見ると、これら詩人達の「メタフィジカル」と呼ばれる理由がわかり、その特徴が分る。

(pp. V, XVI) “Metaphysical in this large way, Donne and his followers to Cowley are not, yet the word describes better, what is the peculiar quality of their poetry than any other, eg. fantastic, for poetry may be fantastic in so many different ways ;

witness Skelton and Elizabethans and Hood and Browning. It lays stress on the right things—the survival one might say the reaccentuation of the metaphysical strain, the *conceiti metafisici ed ideali* as Testi calls them in contrast to the simpler imagery of classical poetry, of mediaeval Italian poetry; the more intellectual less verbal, character of their wit compared with the conceits of the Elizabethans; the finer psychology of which their conceits are often the expression; their learned imagery; the argumentative, subtle evolution of their lyrics; above all the peculiar blend of passion and thought feeling and ratiocination which is their greatest achievement. Passionate thinking is always apt to become metaphysical, probing and investigating the experience from which it takes its rise. All those qualities are in the poetry of Donne, and Donne is the great master of English poetry in the seventeenth century.”

(ダンやその流れをくむ人達からカウレイに至る此の広い意味でのメタフィジカルというのは想像的というのとはちがう。メタフィジカルという言葉こそ、何よりも、詩そのものが持つ特異性を、はつきり示している。想像的といえは詩なるものは色々な方法に於いて、元來、想像的なものである。例えばスケルトンやエリザベス朝時代の詩人達やフードやブラウニングを見るがよい。正しいものを強調することで、例えば、メタフィジカル的な旋律を残しておく、又は再強調する事だと言つてよい。即ち古典詩とか、中世紀イタリーの詩のより単純な像と対照して、テストが *the conceiti metafisici ed ideali* と呼ぶ所のものであるといつてよい。更に智的な更に逐語的でない性格の機智が、エリザベス朝時代の奇想と比較して感じられるのである。彼等の奇想(*conceits*)は、しばしば、一層細密なる心理の表現である。その学者的な表象 抒情詩の議論的な細密なる展開、就中、感情と思想感及推論の奇妙な混合で、これこそは最大の成果である。激情のあふるる思いは兎角、メタフィジカルになり易く、その起因となる経験をさぐり、調べるものである。之等の特性は皆ダンの詩中に見られるので、彼こそは、十七世紀の英詩に於ける偉大なる詩人である。) 以上のグリアソンの言葉は要約すればつぎのようになる。

1. メタフィジカルなる言葉の意味を明らかにした。原意は哲学的概念より、17世紀のダン一派の詩の特性を云う。
2. 特有の旋律を有し、智的、心理的、情熱的な発表

の方法を有す。

### 3. ダンの英詩に対する功績

ダンを推賞しているのはグリアソンのみでは無い。<sup>5</sup>メタフィジカル、という名を問題にしているのもグリアソンのみでは無い。試みに日本人の手になる英文学史を見るに、大和資雄氏は、氏の「英文学史」上巻に於いて、(p. 130)「ダンの影響をうけた詩人達の中で、特にその冥想的な宗教的な題材と、奇想に富む比喩などの技法とを受容れた一群の詩人は『形而上的詩人』とよばれる。これは強いて訳さずに、メタフィジカル・ポエツと言う方がよかろう。」と書いている。

そもそも、この「メタフィジカル」なる語を、ダンからカウレイに至る十七世紀の詩人に対して使い初めたのは文豪ジョンソン博士である。彼はその名著「詩人傳」に於いて先ず第一にカウレイを取上げているが、その中で初めてこの語を用いたのが、この起りである。そのことに関しては、T. S. Eliot も述べているが、Sir Archibald Strong (1876-1931) も、著書 *A Short History of English Literature* で

“He (Donne) is the first of the poets styled by Johnson ‘metaphysical’.”と記している。Dr. Johnson は “metaphysical poets” について、何と云つてるか。(Lives of the English Poets by Samuel Johnson with an Introduction by Arthur Waugh, Vol. I, Oxford University Press, p. 13) “About the beginning of the seventeenth century appeared a race of writers that may be termed the metaphysical poets; of whom, in a criticism on the works of Cowley, it is not improper to give some account.” 即ち(十七世紀の初め頃、メタフィジカル・ポエツと名付けてよい一群の作者が出たが、カウレイの作品を批評するに当り、説明を加えても不適當なことはあるまい。) かくて、ジョンソン字典の著者は、彼等に新しい意味の言葉を呈上したのであつた。曰く、

“The metaphysical poets were men of learning, and to show their learning was their whole endeavour; but, unluckily resolving to show it in rhyme, instead of writing poetry, they only wrote verses, and very often such verses as stood the trial of the finger better than of the ear; for the modulation was so imperfect that they were only found to be verses by counting the syllables.”

(メタフィジカルの詩人連中は、学者である、彼等の学問を見せることが、その努力の全部であつた。だが不幸なことに、その学問を韻をふんで示そうとしたものだ

から、詩は書かず、書いたものは、韻文だけであつた。又、兎角、そうした韻文は、兎角、指の先でひねくる試みには合格しても、耳で聞いて見るとそれ程よくないものだ。というのは、抑揚が実に不完全だからで、音節を数えてみてやつと韻文だとわかるのである。) 次に、ジョンソンは、メタフィジカル・ポエツを詩人と認めず “wits” にすぎないと言つて、かく名付けた理由を明らかにしているが、要するに、此の派の詩人の欠点を容赦無く指摘しているのである。然しその努力が全然無駄であるのではないと云つて、

(P. 16) …… if their conceits were far-fetched, they were often worth the carriage. …… To write on their plan, it was at least necessary to read and think. …… No man could be born a metaphysical poet, nor assume the dignity of a writer, by descriptions copied from descriptions, by traditional imagery, ……

(彼等の奇想が余りに、こじつけのようであつたにしても、伝える価値のあるものが屢々見出されるのだ。彼等の計画によつて書くためには、少くとも読書したり、思想を練つたりしなければならぬ。人の記述したものを写しとつたり、昔からの比喩をうつしとつて、著者の威厳を保つ、ことも出来ないし、生れながらのメタフィジカル・ポエツになることも誰だつて出来ないのだ。) 要約すれば、之等のメタフィジカル・ポエツの詩に於ける特徴は三種類あることがわかる。その一つは奇抜な比喩でジョンソン博士が云う所の “something unexpected and surprising, grossness of expression, the most heterogeneous ideas are yoked by violence together” の語句で表現している所の聯想も及ばぬ様な奇抜な比喩を、思いもよらない所に用いることである。その conceit, wit, 及その産物の imagery の特徴はここにあるといえる。第二の特徴は、分析的な傾向で、ジョンソン博士の言葉を引用すると、“their attempts were always analytic, they broke every image into fragments, pursuing his thoughts to their last ramifications, branching it into small parts” で、これは George Williamson の Donne Tradition にも引用され、T. S. Eliot も、これを認めている。勿論エリオットの形而上詩人に対する一つの功績は更に歩を進めその統一性を認めたことにある。“Johnson has hit, perhaps by accident, on one of their peculiarities, when he observes that ‘their attempts were always analytic’; he would not agree that, after the dissociation, they put the material together again in a new unity.” (Essays

p. 160, Krnkyn Sha Press) (ジョンソンが「この詩人達の試みはいつも分析的であつた」と述べたのは、多分偶然ではあろうけれども詩人の性特の一つをうまく云いあてたのだ。分析後又新しく統一した事にはジョンソンは同意しまい。) 第三の特徴は、表現の仕方が平易で散文的であることである。これがジョンソン博士のかゝる詩人に対する不満の最大原因であつたことは、博士の学識に徴しても想像できるが、彼がメタフィジカルポエトリの説明の中で、前に引用した如く「之等は詩では無い。韻文に過ぎない」と悪口を云つている理由である。「詩人傳」の中で、ジョンソン博士が引用しているダンや、カウレイの詩を見ても、その用語は、monosyllable, every day language のものが多く、所謂、far-fetched imagery に類するものを除いては、誰にも了解される日常会話用語がよく用いられてある。例えば、ダンの詩にある。

“For God's sake hold your tongue and let me live.”

(後生だから黙つてて、私を生かさせてよ)

など全く、会話体である。George Herbert の “Virtue” の第一節を引用すれば、

“Sweet day, so cool, so calm, so bright,  
the bridal of the earth and skie—  
The dew shall weep thy fall to-night;  
For thou must die.”

(優しき日、涼しくも、おだやかに輝けく、  
天と地の婚礼よ。

露は嘆くらん、なれの夜に落つるを  
死なねばならぬ汝 想いて。)

美しい清らかな用語で、同時に平易で、その殆んどが一綴語であり、アングロ・サクソン系の語である。詩の用語でありながら、散文にも用いられるものである。

表現用語の平易さは、“metaphysical poets” の特徴がその奇抜な conceit, imagery にある点から考えると意外に思われるが、彼等の作品を考える時、必ず感じる特徴の一つで、ジョンソンは “they were careless of their diction” とけなしているが、グリアソンはその著書 “Metaphysical Lyrics and Poems of 17th Century” の序文で次の様に述べており、前に引用したハーバートとゲレイの詩を比較している。

(P. xxxi) “Donne and Jonson are probably in the main responsible for the unconventional purity and naturalness of their diction, for these had both ‘Shaken hands with’ Spencerian archaism and strangeness, with the ‘rhetoric’ of the sonneteers and poems like *Venus and Adonis*; and their style

is untouched by any foreshadowing of Miltonic diction or the jargon of a later poetic vocabulary. The metaphysicals are masters of the 'neutral style', of a diction equally appropriate, according as it may be used, to prose and verse. If purity and naturalness of style is a grace, they deserved well of the English language, for few poets have used it with a more complete acceptance of the established tradition of diction and idiom."

(ダンとジョンソンが、多分主として、彼等の用語の月並では無い清純さと自然さに対して盡す所のものが多い。二人共、スペンサーの古風怪奇な表現を、十四行詩作者の「美辞」と、ヴィナスとアドゥスの様な詩に「手をつないだ」のである。ミルトン風の詩語や、その後の時代に起つた詩語を予見さすようなものは、彼等の詩型には見られない。メタフィジカルの作者は、所謂、「中性詩型」に優れ、即ち使用される所に従つて、散文にも詩にも、同じ様に適当な用語なのである。詩型の清純さと自然さが、人を引きつける優雅なものなら、彼等は英語の言語として、十分賞讃を受ける価値がある。実際、傳統的に伝えられている用語、熟語を、あれ程完全に受け入れての英詩を書いた詩人は少ない。)

グレイの詩に触れた後、更に筆を進めて、ワーズワスに及び次にコウルリツヂの言を引いている。

....." as Coleridge pointed out, the style of the 'metaphysicals' is the reverse of that which distinguishes too many of our most recent versifiers, the one conveying the most fantastic thoughts in the most correct language, the other in the most fantastic language conveying the most trivial thoughts.

(コウルリツヂが指適している様に、「メタフィジカル」の詩型は、最近の余りにも多数の作詩者達を顕著ならしめている所のもとの丁度反対のものであつて、前者は最も正しい言語で最も奇想的な思想を伝え、後者は最も奇想的な言語で最も些細な思想を伝えるのである。)

以上述べた特徴によつて解る様に、ダンに初まる metaphysical poetry は十七世紀の英語詩として特異の存在でその意義もまた大きい。

然し、ダンの眞價は、長い間に亘つて理解されることが無かつた、ジョンソン博士はその特徴を指適しているが、それはその推賞の意味ではなく、その欠点として取上げた厳しい批評であつた。

"Dr. Johnson tried to describe Donne's poetry by its defects, and criticism down to Courthope has

tended to follow this path. Metaphysical wit and the conceit get a large share of this condemnatory criticism." (Williamson: The Donne Tradition.)

(ジョンソン博士は、ダンの詩をその欠点によつて記述しようとした。カーソープ迄の批評も大体それに従つたのであつた。形象的機智、奇想はこの悪評を大いに受けたのであつた。)

石田憲次氏がその名著「ジョンソン博士とその群」の中で次の様に述べているのは、これ又ウィリアムソンの前述の言葉を裏書きする。(pp. 230-231)「このジョンソンの趣味から排撃せらるべきものは、前代のダン・カウレイ等の詩風であつた。彼等は屢々、唐突なる譬喩を用ひ、精妙隠微なる論理を操り、森嚴と野卑とを共懐せしめ、諷誦にふさわしからず、理解に易からざる詩体を作り出した。ジョンソンは、カウレイ傳に於て、彼等を metaphysical poets と銘うち、その詩風の欠点を披羅剔抉して、近年に至るまでの文藝批評の定説を樹立したのであつた。」

近代の批評家達によつてダンは再評價され、殊に、エリオットは、——ウィリアムソンの言葉をかりれば、"eccentric eddies of English poetry" (英詩の變則な流れ)ではなく、——(*The Metaphysical Poets* p. 290, in *Selected Essays*, 1951)

"May we not conclude, then, that Donne, Crashaw, Vaughan, Herbert and Lord Herbert, Marvell, King, Cowley at his best, are in the direct current of English poetry, and that their faults should be reprimanded by this standard rather than coddled by antiquarian affection? They have been enough praised in terms which are implicit limitations because they are 'metaphysical' or 'witty', 'quaint' or 'obscure', though at their best they have not these attributes more than other serious poets".

(さうであるとすれば、ダン・クラシオ・ヴォーン ジョージ・ハーバード及びハアバート卿、マアベル・キング、秀作に於けるカウレイは英詩の直系に属して、その欠点は古物趣味によつてよつて甘やかされるよりも寧ろこの標準によつて非難されなければならないという結論を與えてはいけなであらうか。これらの詩人は、「形而上的」或は「機智に富み」、「風變り」或は、「不明瞭」なるを以て、——優れた作品の中では、他の眞面目な詩人と同じく、こういう特質がないのであるけれども——内々制限を含めた言葉でよく賞讃されて來た。〔矢本貞幹氏訳〕と述べているが、かゝる詩に対しての認識を新たにするものである。

## II. マーベルの「形而上詩人」 としての立場

Grierson は云う。(Introduction P. xxxvii But the strongest personality of all is Andrew Marvell. Apart from Milton he is the most interesting personality between Donne and Dryden, and at his very best a finer than either.

(しかし一番強く、その個性を示したのは、アンドリュウ・マーベルである。ダンからドライデン迄の間で、ミルトンを除いては、彼が最も興味ある人物であり、然らして彼の最大傑作は両詩人のものに優る。) ルイ・カザミアン (Louis Cazamian) はその英文学史で (p. 558) 「自然は彼に十分な恵みを與えた。その誠実さと直截な想像力の点で、彼がぞくしている形而上派の衰微をくい止めて之を高め荒唐を避けて想像と理性を結びつけるのに力があつた」と称えている。

## III アンドリュウ・マーヴェルの生涯

マーベルの詩のあらゆる方面を知る爲には、その生涯及び王政復古時代を中心とする英國の政治生活にも言及せねばならない。

彼は1621年3月1日、ヨークシャのウインステッドの村に、その教区牧師の長男として生れた。父は敬虔な評判のよい牧師であつたが三年後の624年に、ハルの町の小学校長になり、マーベルも其處で教育を受けた。ケンブリッジの Trinity College 卒業前、ラテン語詩集を王女アンの生誕の時、他の詩人達と共に出している。その他にも、ヘステング追悼の詩等に、彼の名も見えるが、独特の風格を示した詩らしい。1650年、29才のマーベルは、既に大陸四年間の旅行も経て、フェイアファクス卿の一人娘メリーの家庭教師として、丁度その頃、ヨークシャに住む様になつた卿と共に、その閉居 Nun Appleton House に暮すこととなつた。遠い昔、尼寺であつたというこの館は閑寂そのもので、自然のままの老木そびえ立ち、花壇には百花咲き乱れ、ようやく詩人として踏み出したマーベルは、この恵まれた環境に於いて、自然の美を満喫し、それはやがて詩となつて歌われ、自然詩人としての地歩を益々固めることになつたのである。彼の Upon Appleton House はこの館を歌つたものである。

1652年2月、ミルトンは当時、クロムウエルの外國語秘書官であつたが、マーベルを自分の協力者として推せんしている。海外旅行の経験あること、ラテン、ギリシヤ文学を広く知つている学者であること、又四ヶ國語に

通じていること、フェイアファクス卿家の家庭教師であつたこと等を挙げているが、このミルトンの推挙はマーベルの人となりを想像させ、推挙されるだけの人品を備えた人物であつたことがわかる。この時のミルトンの推せんは不成功であつたが、1657年、その機会が到來し、ミルトン、ドライデンと共に、ラテン語秘書の一員となり、年俸二百ポンドを與えられた。これを機にその後の彼の公人としての生活が始まるのである。

1658年のクロムエルの死に伴う清教徒政府の没落、チャールス二世のオランダよりの帰還による1660年の王政復古と相繼ぐ政變の中にあつて、清教徒であり、王党反対者であるミルトンの親友マーベルは多くの人が變節のそしりを受けたのに、その清節を守り、難関を切り抜けた。ここに彼が自然詩人たるほかに、如何に才たけ、勇氣のある人であつたかが容易にうかがわれる。

1659年、マーベルはハルの町で選出議員として、国会にその名を列ねるに至つた。彼はその地位を世を去る迄持ち続けた。その間に二度海外に旅行した外は、忠実な行い正しい議員として、その公生活を全うした。彼自身、壇上に雄弁をふるうことは無かつた様であるが、ミルトンのために二度迄も立つた。一度はその無罪を決議せしめ、一度は警察官吏の不法を牽制したことによつても彼が勢力のあつた人物なることが分る。彼の議会に於ける活躍中、最も注目し得るものは1671年に提出された新教徒監禁法案に対する反対演説であつた。彼は英國王が旧教であつたが、この法案通過の場合、大僧正の支配し得る力は測り知れぬものがあるとの論拠のもとに堂々とその所信を述べた。チャールス二世にはこの様なことがあつたにも拘らず愛顧を受け宮廷での地位と千ポンドの贈與を申出られたがその両方とも固辞した。

マーベルは又、チャールス二世の宮廷の綱紀の乱れ、悪政に対して、痛烈な皮肉に満ちた詩を書いた。これらの詩は当時の英國の政治的方面を反映するものである。

斯う云う様な公生活後、マーベルは卒如として世を去つたのである。ハルの町は投票によつて、マーベルの爲に記念碑を建てることを決議したが、政府によつて、そのことは禁ぜられたのである。

彼は中肉中背で、可なり丈夫そうに見えて頬はつややかに、髪の毛は茶色だということである。

## VI. マーベルの詩

彼の作品は、その作品を反映して、二種類、一つは、愛と自然とを讚美した詩、他は、王政復古後に、彼の愛する祖國の悪政、チャールス二世の宮廷のびん乱に對し彼が浴びせた痛烈な諷刺詩である。

マーベルが書いた諷刺詩も特異なものらしい。が、メタフィジカル・ポエツトとして見られるのは実に彼の恋愛詩や自然詩に於てである。自然詩人としての彼は、ワーズワース以上とも云われる位自然そのものに溶けこんだ詩の世界を描いている。彼の生涯に於ても述べた様に、彼がフエイアファクス卿と共に過したアブルトンの館時代はマーベルにとって詩作の豊かな時代であつた。

Uppon Appleton House

The Nymph, complaining for the Death of  
her Fawn, The Mower's Song, 及 To His Coy  
Mistress

等はこの時代の作である。

the Garden と Bermudas

とは二、三年後のものであろうとの説もあるがこの時代に関係があるものであろう。この二つの詩は、To His Coy Mistress と共に、彼の代表作と見られる。これから述べようとする「庭園」は、彼の「アブルトンの館にて」の中に歌われている自然の趣の豊かな庭園によつたので、それを更に精練した甘美なものである。

人然の中に人が混然と溶け込んだ陶酔の境地を描き出した点に於ては、トマス・グレイや、ワーズワースにも見出されない樂天地を展開したもので、マーベル独自の世界である。この詩に於ては人と自然との孤独の悦びを歌つたもので、最も美しい自然詩といえる。ミルトンも孤独を歌っているがマーベルとは自ら違ふものを持つている。ミルトンの孤独は孤高なる孤独、何物にも溶け込み得ぬ悲しみにあふれたもの、マーベルのとは全く反対である。1681年版の詩集には、この The Garden と On a Drop of Dew のラテン訳が印刷されてはあがあるが、初めはラテン語で、どちらの場合にも書かれ、その後、ラテン原文に則つて、美しい英詩に書き改めたいらしいということである。次に各英文で彼の詩を書き、その訳及批評をする形式に従いたい。

The Garden (Thoughts in a Garden)

- (1) How vainly men themselves amaze  
To win the Palm, the Oke, or Bayes;  
And their uncessant Labours seee  
Crown'd from some single Herb or Tree,  
Whose Short and narrow verged shade  
Does prudently their toyles upbraid;  
While all Flow's and all Tree do close  
To weave the Garden of repose.
- (2) Fair quiet, have I found thee here,  
And Innocence thy Sister dear,  
Mistaken long, I sought you then

In busie Companies of men.

You sacred Plants, if here below,  
Only among the plants will grow  
Society is all but rude  
To this delicious Solitude.

- (3) No white nor red was ever seen  
So am'rous as this lovely green.  
Fond Lovers, cruel as their Flame,  
Cut in these Trees their Mistress name.  
Little, alas, they know, or heed,  
How far these Beauties hers exceed!  
Fair Trees! where'er your barks I wound,  
No name shall but your own be found.
- (4) When we have run our Passions heat,  
Love hither makes his best retreat:  
The Gods, that mortal Beauty chase,  
Still in a Tree did end their race.  
Apollo hunted Daphne so  
Only that she might Laurel grow;  
And Pan did after Syrinx Spled  
Not as a Nymph, but for a Reed.
- (5) What wond'rous Life is this I lead!  
Ripe apples drop about my head;  
The luscious clusters of the Vine  
Upon my mouth do crush their Wine;  
The Nectare, and curious Peach,  
Into my hands themselves do reach;  
Stumbling on Melons, as I pass,  
En snar'd with Flow's, I fall on grass.
- (6) Meanwhile the mind, from pleasure less,  
Withdraw into its happiness;  
The Mind, that Ocean where each kind  
Does streight its own resemblance find;  
Yet it creates, transcending these,  
Far other Worlds, and other Seas;  
Annihilating all that's made  
To a green thought in a green Shade.
- (7) Here at the Fountains sliding foot,  
Or at some Fruit-trees mossy root,  
Casting the Bodies Vest aside,  
My soul into the boughs does glide;  
There like a bird it sits, and sings,  
Then whets, and combs its silver Wings,  
And, till prepar'd for longer flight,

- Waves in its plumes the various Light.
- (8) Such was that happy Garden-state,  
While Man there walk'd without a Mate:  
After a Place so pure, and sweet,  
What other Help could yet be meet?  
But 'twas beyond a Mortal's share  
To wander solitary there:  
Two Paradises 'twere in one  
To live in Paradise alone.
- (9) How well the skilful Gardner drew  
Of flow'rs and herbes this Dial new;  
Where from above the milder Sun  
Does through a fragrant Zodiac run;  
And, as it works, th' industrious Bee  
Computes its time as well as me.  
How could such sweet and wholesome Hours  
Be reckon'd, but with herbes and flowers.
- (1) 人々の悩みぞ如何に空しきや  
棕櫚、櫻、はた又月桂樹を得んとして  
彼等がたゆまぬ働きはただ  
一本の草木もて冠せらるるのみ  
その短かく又狭き木蔭  
心しつ彼等の骨折を難ず  
しかるに縋ての花や木集まりて  
いこいの花環を織りなすなり
- (2) うつくしき静寂よ、ここに汝を見出しぬ。  
汝が愛しき清浄をも亦!  
久しく誤りて我汝を求めぬ  
忙しげなる男の集りの中  
なれの聖なる草木、この下にも  
ただ植物の中にぞ成長するならむ  
世の中を野卑とぞ呼ばん  
かく快よき寂寥にくらぶれば
- (3) かつて見し白き色、赤き色。  
この美しき緑の如・心樂しきは無かりけり  
恋に溺れし若者ら、炎の如く容赦なく  
木々に刻めり、いとしの名前  
あわれ彼等も知らぬなり、心せざるなり  
木々の美のはるか彼女に優れるを!  
麗わしの木々よ、我、汝の樹皮を傷つくならば  
汝の名のみぞ刻まんものを。
- (4) 我等、熱情の炎を追う時  
愛はここに、いとよき隠れ家を求む  
人の世の美を追ひ求む神々
- 常に一本の木にその追跡を止む  
アポロかくてダフニーを追いぬ  
唯彼女月桂樹とならんがために  
パンのシリックスを追ひしは  
ニンフに非ず、蘆草の彼女をぞ求めて。
- (以下三節は竹友藻風先生の訳)
- (5) わが送るこの生こそ奇しけれ  
熟みわたる林檎はわれの上に落つ  
あまき露、ゆたかなる葡萄の房は  
その酒をしぼりて唇に注ぐなり  
すつばい桃、味すぐれたる桃の果は  
彼等よりわが手の方え手をのばす  
行きがなに、瓜につまづき、花に足  
絡まれて、われ草にぞたをれ伏す。
- (6) その間、世のささやけき娛樂より  
心、その幸福に遅れ入るなり  
心そは、各のたぐいのものが  
似るかげをただちに見るといふ海ぞ  
されど、そは、さらにこれらのものを超えて  
遠き他の世界、他の海をぞつくる  
造られしものみなを滅じつくし  
縁の木かげ、縁なす想いとなして。
- (7) ここにして吹上げの滴のもとに  
または果をもてる木の苔むすもとに  
色身の衣をばかいやり捨てて  
わが霊は枝の中えと滑り飛ぶなり  
そこに行き、鳥のごと、とまり歌いて  
さて、銀の翼をつくろい、羽搏き、さらに  
いや長き飛翔のそなえ終るまで  
その翅に七彩の光をふるう。
- (8) かくありき、うまし園のさま  
友も無くかしこ歩きし時は  
かくも清らかに、快よき所におりし後  
他の如何なる助け之にふさわしかるべきや  
されどそは人間の與り知る幸にあらざりき  
唯一人かしこをさまようことは  
二樂園、一ふるになりたるに等しからむ  
唯一人樂園に住まうことあらば。
- (9) わざすぐれたる庭師、巧みにも作れるは  
花と草にてこの新らしき日時計よ!  
そこには和やかなる太陽、上空より  
かくわしき黄道帯を廻る  
その動きにつれ、孜々として蜂も又  
我等と同じく、時の移りを計るなり



かく快よく健やかなる時の流れ

いかに計らるべき、草と花によるにあらずば。）

第一節二節を見ると如何にマーベルが生い茂つた庭園の草木の中に溶けこんで、色々と思いを走らせているかがわかる。先ず人間と木々との関係を考え人間のつまらない努力を笑いたくなる。目に入る緑、緑、緑なす想い彼は緑が大好きだ。大樹を見るにつけ昔の神話を描き、実れる果物に目をうばわれる。美を満きつして、第七、八節に軽い美しい奇想が見られる。技巧的である。ワーズワース等の自然詩に見られない「意象」があり、又 image がある。或いは baroque 趣味が見られると云うかもしれない。美しい詩であるがジョンソン博士の云う metaphysical の特徴を備えている。

To His Coy Mistress に於いて、恋人に寄せて用いた意象は即ち自然詩に於いて、nature (自然) に寄せた意象と同様のものである。ここに、彼の自然詩と恋愛詩との間に共通した「形象詩」としての特徴がある。この詩に於いて、詩人が言わんとしていることは非常に理論的な形式であらわされている。即ち syllogism, 一種の三段論法である。全篇46行で抑揚格四歩句で書かれ、意象に満ちている。最初は

Had we but World enough and Time,  
This coyness, Lady were no crime  
We would sit down, and think which way  
To walk, and pass our long Loves Day.  
と、普通に穏やかに書き出しているが、次の行からは、  
Thou by the Indian Ganges side  
Should'st Rubies find; I by the Tide  
Of Hunber would complain I would  
Love you ten years before the Flood,  
And you should if you please refuse  
Till the Conversion of the Jews.

と急に、ガンヂス川からハンバー河に至る空間と、ノアの大洪水の以前から、到底あり得ないと思われている。ユダヤ人が悉くキリスト教に改宗する時迄の時間とが追つて来る。

次にその恋愛は意象の広さと速度に従い、無限に拡がり

My vegetable Love should grow  
Vaster than Empire, and more slow.

更にその大きさは果しなく、恋人の眼を讀み、額を見つめるのに百年、一つ一つの乳房を仰ぎ見るのに二百年その他の所に三万年、あらゆる部分は少くとも一代を費すに至つては余りに現実離れているが、その後ろに落付いた現実の声が聞える。次の四行は巧みな奇想で殊に後の

二行の couplet は Strong も Great couplet なりと称えている。

But at my back I always hear  
Times winged chariot hurrying near;  
And yonder all before us lie  
Deserts of vast Eternity.

次の九行は形象詩人としてのマーベルをよく示している。その奇想は独特のものであり、最後の二行はダンによく似た典型的な意象である。この詩は単にマーベルの代表作である許りでなく、形象詩的恋愛詩として代表的なものである。マーベルの意象は形象詩人特有の考え方と感じ方を代表するものとして意義を持つ。(竹友氏の訳あれど皆省略す。)

And now, like amorous birds of prey,  
Rather at once our time devour,  
Than languish in this slow-chapt power.  
Let us roll our Strength, and all  
Our sweetness, up into one ball;  
And tear our Pleasures with rough strife,  
Through the Iron Gates of Life.  
Thus, though we cannot make our Sun  
Stand still, yet we will make him run.

以上述べた自然詩と恋愛詩の他に對話の形をとつたものもある。A Dialogue between Soul and Body は宗教詩とも云える道徳的なものである。

マーベルの書いた詩の中で最も堂々としたものは、An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland であろう。これと同じく、オリヴァ・クロムエルを歌つた抒情詩があつて、それらは王政復古以前のダンの流れを汲んだ形象詩人としてのマーベルが、ドライデン時代の詩風に移つて行く過渡期にあることを発見する。竹友蕨風氏の云われる如く、マーベル後年の作である諷刺詩は、heroic couplet を固守し、又その考え方に於いてもドライデンに見る様に理性に訴える詩である。形象詩人としてのマーベルの詩には、その特色である機智 (wit) 或いは奇想 (conceit) と彼独特の詩的情緒とがとけ合っているのに対し、彼の諷刺は理性と激烈な感情の結合が見られる。クロムエルを歌つた詩はこの二派の詩の中間に存するものらしい。それは又複雑な政變の中に生き延びた詩人の複雑な感情を現わすものである。

誠にマーベルの生涯は清浄なものであつた。マーベルの色もそれを表象する緑一色、清浄なる想いは彼の自然詩となり、恋愛詩となり、方面を變えると諷刺詩となつたのであつた。マーベルが当時世間から認められなかつたと云う訳では無いが、人は一代のものならず、眞に

價值あるものは必ず後世に傳わつていつかは必ず正しい  
評價をうけるものであることを彼の生涯を見るに當つて  
今更の如く悟るのである。

参 考 書

石田憲次「ジョンソン博士とその一群」(研究社昭和24年4月10日再版行)

Samuel Johnson : *Lives of the English Poets* with Introduction by Arthur Waugh vol. Oxford Uni. Press

George Williamson ; *The Donne Tradition* Cambridge (1930)

Quiller-Couch : *The Oxford book of English Verses* (1925-1950)

Herbert Grierson ; *Metaphysical Lyrics and Poems of 17 Century*, (Oxford 1921-1922)

Strong, Archibald : *A Short History of English Literature*, Oxford University Press, 1927

大和資雄 : 英文学史 上巻、野村書店21年8月15日発行

Manly, John Matthews ; *English Prose and Poetry*, Revised Edition. Ginn and Company 1926

Kiichi Hirata : *The Essays of Elia by Charles Lamb* with Introduction and Notes, Kenkyusha, 1922

Emile Legouis & Louis Cazamian : *A History of English Literature* Revised Edition, Dent

T. S. Eliot : *Selected Essays*, Faber, London, 1951

Chapp. 'The Metaphysical Poets'; 'Andrew Marvell' Cambridge History of English Literature Vol. VII, Chap VII

Chamber's Cyclopaedia of E. L. Vol I, p 711 ff

T. H. Ward : *The English Poets* 4 vols. Maemillan 1920

Vol. II The Seventeenth Century.

'Andrew Marvell' w. Introduction by Goldwin Smith